

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/ File.012-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介しますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 :小宮豊隆の自筆資料

■資料のひとつPR:夏目漱石への思慕を抱き続けた小宮豊隆の 思いを知る

■資料写真 :①日記 ②俳句手帖(自筆句) ③装帖

■資料メモ

小宮豊隆と夏目漱石との親交の深さは当館資料に残る多くの漱石書簡などからも明らかですが、豊隆は毎年12月9日(祥月命日)の漱石忌を欠かさずに勤めました。いかに漱石と過ごした日々の様々な思いが去来したことでしょう。

ある年の雨が降った12月9日の日記(写真①)には、漱石が亡くなる寸前に自宅に駆け付けた豊隆が雨に濡れた玄関前で転んで、それを見た奥さんの鏡子が、「ああ、もう駄目だ」と漱石の死を思った話を後から聞いたと書かれています。漱石と縁深い豊隆がゆえの経験かもしれません。

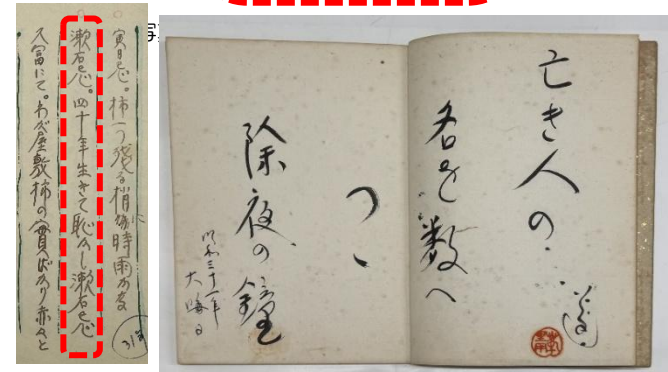
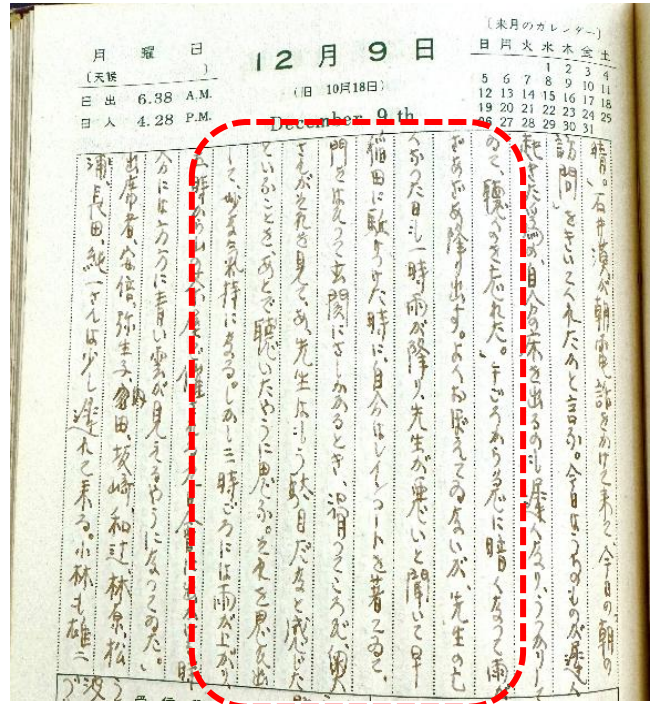
また豊隆は節目ごとに常に自分の人生の在り方を漱石に問うような句を残しています。三十三回忌には「生きてこの漱石三十三回忌」、四十年の漱石忌には「四十年生きて恥ずかし漱石忌」(写真②)とあり、40年の数字は自分の年ではなく漱石没後の時間です。大晦日には「亡き人の名を数えつつ除夜の鐘」(写真③)とあり、自分と親交を深め亡くなった方々を思い浮かべる中には漱石も含まれると思われます。

そこには、家族とか、自身への期待とかありきたりのことではなく、どこか刹那的な、またストイックに掲げた漱石の残像を求めてやまない豊隆がいます。彼の思いは常に漱石にあり、亡くなってなお姿を追い求め、自省とともに漱石の姿は存在します。師匠であり父である漱石に認められる自分でありたいと願う子どものような豊隆の姿でしょうか。

世間で「弔上げ」と呼ばれる五十回忌を迎える年、豊隆は「五十年生きて恥ずかし漱石忌」と句を残します。そして、その年、小宮豊隆は亡くなり夏目漱石のもとに旅立ちました。

■整理担当者のつぶやき

1,000点を超える小宮豊隆資料を整理しながら、「夏目漱石」というキーワードを見ない日はありませんでした。この資料を通じて小宮豊隆の残したものの中には、小説家としての漱石ではなく、師であり父であった人間・漱石への思いや言葉代弁する豊隆があふれています。漱石の言葉をかみしめながら漱石を求め続けた、それが豊隆の人生だったのかなと思いました。そんなことを感じられるひとときは、資料整理ならではの醍醐味です。



写真②(左)俳句手帳自筆句 写真③(右)自筆句
(どちらも昭和31年)

■資料データ File

- 形状/材質/法量 ①旺文社版社会日記/上製本/B6サイズ
③俳句/和綴じ/本文和紙二つ折り 23.8×13.2 cm
- 制作年代 昭和31年(1956)
- 注目ポイント 小宮豊隆氏の自筆資料!

注) 1. 本文の情報は令和7年3月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。

2. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。